

放課後
コミュニケーション
vol.3



Another Story

チャプター1
放課後の校舎の屋上で



「んっ、あむっ、んん……」

校舎の屋上で雪子にキスをする。舌を唇の間から潜り込ませ、お互いの唾液をからめて混ぜ合わせる。

「ちゅるっ、んっ、じゅるる、んんんんっ……」

更に奥へ舌を送り込むと、雪子の甘い舌がふわりと絡みついている。

「んんっ、んふっ、んあむ、ちゅっ……、んんっ」

普段とは違う他には誰もいない屋上で、存分に二人だけの時間を過ごす。

「んはあ、キス……気持ちいい」

雪子を抱きしめると、トクトクと早打つ鼓動が伝わってくる。

「ちゅっ、んちゅっ、んんっ……、れろっ、じゅるっ」

んっ♡

んっ♡



唇を離すこととはなく、舌の動きは次第に激しくなっていく。零れる涎を気にもせず、漏れる吐息は熱を帯びていく。

「んふっ、ちゅび、んん……、れる、れるっ、はぁっん」

雪子の口内に舌を伝って唾液を送り出すと、自分のと混ぜたものを送り返してくる。そうして何度も抽送を繰り返す。

「ん、じゅるっ、じゅるるっ……はっ、んちゅ、じゅぶっ」

キスは既に5分以上続いているだろうか、お互いに止める気配はなく、明らかにキスよりも先の「とを求めていた。

「んはっ、ん……、誰も来ないみたいだし……いいよね？」

雪子の間にコクリと顔き返す。

ちゅっ♡

んっ♡

じゅっ♡

じゅっ♡

あっ♡

んん♡





「JJJ……たしへ硬さ46♥」

雪子の掌が股間を圧える。
服の上から形をなぞる様「トア」動く。

「総ロビツトおぢいね♥……」



「すっい……おちんちん……んなに……♡」

雪子の舌が這うように先端を舐める。
亀頭、カリ首、裏筋と順に舌の温かさが広がり、
纏わりついた唾液でヌラヌラと光る。

「んむっ、ンロっ、ンロっ……気持ち良さ〜」



「んっ、んむっ、むっ……ちゅぽ」

雪子は先端を咥え込むと口をすぼめてぐっぐっ前後に動き始める。

「ちゅぽ、ちゅぽ、ちゅぽ、ちゅぽ、ちゅぽ……ちゅぽ」

瑞々しい唇のプルプルとした感触が心地良い。

「んっ……気持ちいいなっ ♡」

「いよいよ……来て♥」

白く丸い尻を左右に振り誘う。
指で広げた入り口からは蜜が溢れている。

「……頂戴♥」



サッ

サッ

くぱあ

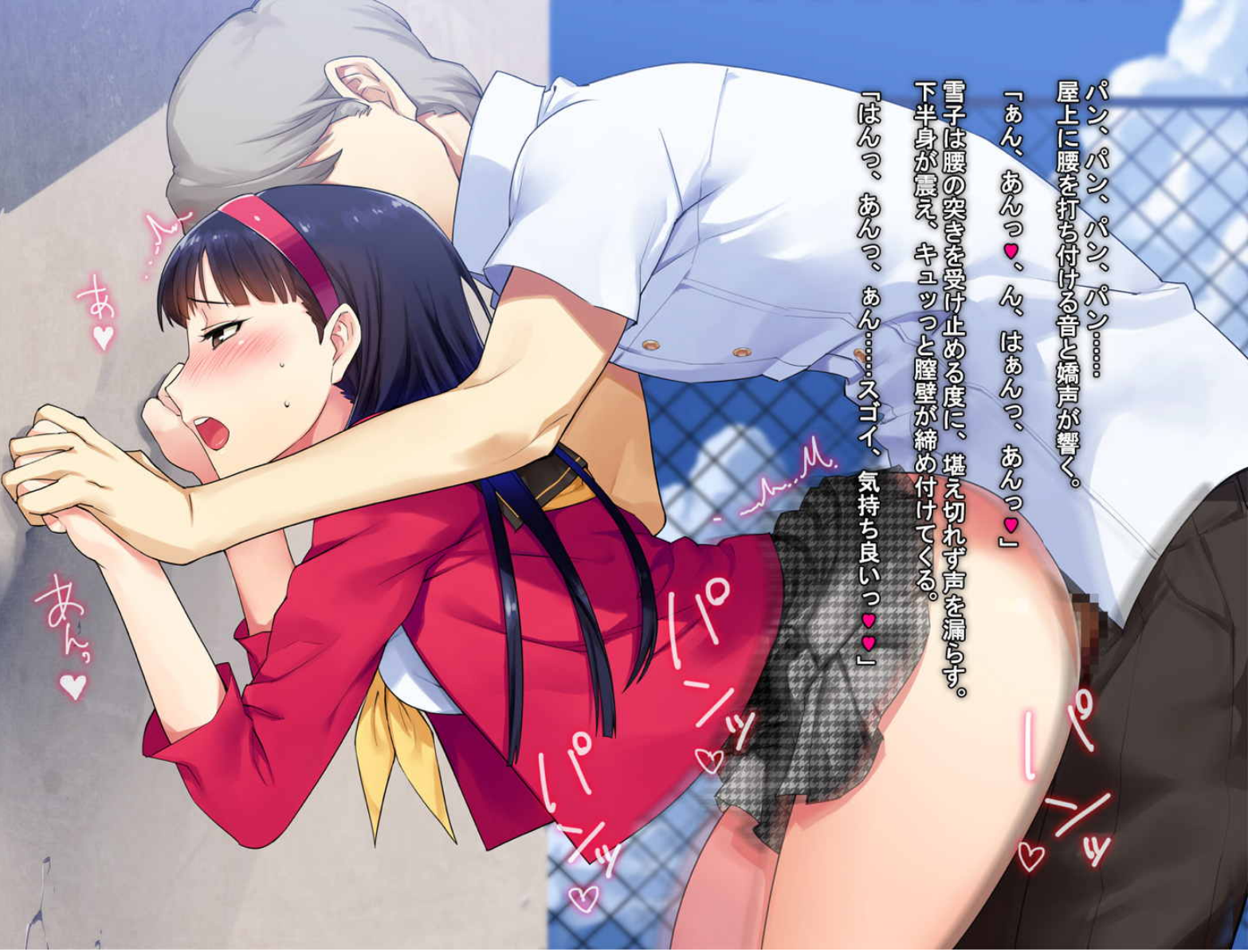
……DT

パン、パン、パン、パン……
屋上に腰を打ち付ける音と嬌声が響く。

「あん、あんっ♡、ん、はあんっ、あんっ♡」

雪子は腰の突きを受け止める度に、堪え切れず声を漏らす。
下半身が震え、キュツツと膣壁が締め付けてくる。

「はんっ、あんっ、あん……スゴイ、気持ち良いっ♡♡」



射精が近くなり、さらに膣の深いところを突く。

「ああっ、奥にっ、深いトコにズンズンって来てる、
イイよ♡、そのまま……一番奥に出して……っっ♡」

堪え切れなくなり、渾身の力で突き入れる。

「あんっ、来てっ、来てっ、いっぱい……来てえっ♡」

ズン
ズン♡

あんっ♡
あっ♡

ズン♡
ズン♡





「んんんんっっ——っ♡♡♡」

射精と同時にイッた膣壁が、さらに射精を促すようにギュッと締まる。それにつられて、ありったけの精液を雪子の中に注ぎ込む。

「あ♡、熱いのがいっぱい、私の中にきてるっ……」

「ハア——ッ……ハア——ッ」

絶頂の余韻を残しながら、呼吸を整える。
雪子の体はピクピクと小刻みに震えている。

「ああ、すいまたイッてる……」

陰茎を引き抜くと、中の精液がドロっと流れ出る。

「はああ、いっぱい出たわ……」



チャプター2
温泉旅館で



「貸し切りにしてよかったね。二人でゆっくり入れるし♥」

雪子は嬉しそうに笑いながら話しかけてくる。
温泉の湯気に包まれながら髪を濡らして、肌が上気した艶麗な姿が似合う。

「ここね、穴場なんだよ。あんまり知られてないけど、料理は美味しいし、景色も綺麗で、ウチの旅館も参考にさせてもらってるの。」

雪子が少しモシモシしながら続ける。

「そ、それにね。……部屋同士が離れてるから恋人や夫婦に人気なんだって……♥」
そう言った雪子の顔が赤く染まる。

チャホン



「もう少し……近くに行つてらさる？」

チャホー

「んっ……はあっ……指、気持ちいいよ♡」

雪子を抱きかかえ愛撫する。膣に指を滑り込ませると、既に軽く濡れていて、膣壁をこすると愛液がにじみ出てくる。

「はんっ、んちゅっ……ちゅ、いいよ、もっとして♡」

コリコリ

ちゅっ♡

ちゅっ♡

んっ♡

くちゅっ♡

くちゅっ♡



「んんんっ、んふっ、あんんっ——♡♡」

指の動きを激しくすると、雪子の反応が大きくなる。声を抑えるために口に必死に吸い付いてくる。

「んむうっ、はんんっ、だめっ、きちやう、きちやうっ♡」

雪子は完全にコチラに身を預け、膣を震わせながら快感を受け入れている。

ビクッ

んっ♡

んんっ♡
んちゅ♡

ビクッ

ちゅっ♡
ちゅっ♡
ちゅっ♡

ちゅっ♡
ちゅっ♡
ちゅっ♡





「んんんんんっ、あんんっ——っ♡♡♡」

雪子が全身を振るわせながら絶頂を迎える。
ピクッと反り返った体を受け止めると、愛撫のお礼をするかの
ように、何度もキスをしてくる。

「はあ、はあ、イッチやった……♡♡♡」

んんん

んんん

ピクッ
ピクッ

ピクッ

ピクッ
ピクッ
ピクッ

んんん

「次は私の番だね♥」

雪子は温泉の中に跪き、胸で陰茎を挟み込む。
柔らかく、フニフニとした感触に包まれる。

「おっぱいで気持ちよくしてあげる♥」

た
び
ん
♥





「んっ♡、んっ♡おちんちん……ピクピクしてる」

温泉の湯とカウパー液が混ざり、ヌルヌルと滑りが良くなる。
胸の上下も徐々に早くなっていく。

「ん♡おちんちん、おっきくなって来た……出そうっ
いつでもいいから、私のおっぱいで……いっぽら出して♡」

んっ♡

んっ♡

ぽちゅ♡

ぽちゅ♡

ぽちゅ♡

ぽちゅ♡

「んきをっやいよきてっ、もっと気持ちよくしてあげる♡♡」
雪子がラストスパートといった勢いで胸を動かす。





「あんっ、っ♡♡♡」

あんっ♡

んっ♡

♡
んっ♡
んっ♡
んっ♡
♡

♡
んっ♡
んっ♡
んっ♡
♡



「ふふっ、おちんちんイかせちゃった♡♡」

雪子は多少ドヤ顔気味に誇らしげに笑う。

顔まで飛んだ精液を指で拭くとペロペロと舌で舐め取る。

「んっ、おいし……♡」

その誘うような仕草に思わず下半身が反応してしまっ。



あっ

あ

あ

「はあっ、あん、あんっ、すい♥……ああんっ」

抑えきれなくなった衝動をぶつけるように突き上げる。
雪子も強い快感を感じているようで突き上げる度に嬌声を洩らす。

「んはあっ、あんっ、いいよ、そこ……キモチイっ♥
気持ちいとっ、当たってるっ……んっ、もっとしてっ♥♥♥」

雪子の膣内が射精を促すようにギュッと締め付けてくる。

「ああっ、くるっ……イクッ、イクッ♥♥」

ズンッ♥

ズンッ♥



「イクッ、イクっ、 あぁぁぁっ」

雪子の絶頂と同時に膣内に射精する。
ドクドクと大量の精液が流れ込んでいく。

「んはぁぁぁっ、 おちんちんビクビクして、 精液いっぱいぎゅるっ」

射精に反応して雪子の中がビクビクと震える。



「はあっ、はあっ、イキ過ぎちゃって立てないや♥」

絶頂の余韻が残るトロツとした顔で雪子が力なく笑う。抱き合ったまましばらく二人で息を整える。

「おちんちんまだ硬いね♥部屋に帰ったらまた……」

何かを求める顔の雪子に応えるようにキスをする。

「んっ、んちゅ、はあ、ちゅ、ちゅっ♥」

またしばらく、二人でキスを続けた……。


はっ

びゅ

トロツ

はっ

はっ



温泉から上がり、夕食を終えると、床の間には既に二組の布団が、意味深長に並べて敷かれていた。

「お約束だけど、なんだか恥ずかしいね……♡」

雪子は布団の上にペタンと座ると、浴衣の襟に手をかける。

「寝るには……まだ、早いよね？」

頬を赤らめながら訊いてくる雪子に頷き返す。

浴衣を開けさせた雪子が馬乗りになり腰をピタリと密着させる。陰茎に押し付けられた局部は既に濡れている。

「はあ……もうこんなに濡れちゃってる……」

雪子はクニクニと陰茎と陰部を擦り合わせ細かく上下に腰を動かす。ねだるような動きに下半身が疼いてしまう。

ドキ

あ♡

ドキ

スリ

スリ

「きつきから……もう我慢できなくて、おちんちん……入れていい？」
切ない声でお願いしてくる雪子に頷きを返す。

「んっ、あんっ、んんんっ♡♡」

入り口に陰茎をあてがうと雪子がゆっくりと腰を下ろす。既に準備の出来ていた膣内の温かさがじんわりと広がっていく。

「はぁ、あっ、……おっ、きらっ……」



「ああっ私の中、いっぱいになっている……っ」

すかさず、雪子が腰を動かし始める。ゆっくりとした動きから、徐々に勢いを増していくにつれて、腰のぶつかり合う音も大きくなっていく。

「あああ、あんっ、んんんっ……いいっ、はっ、あんっ♡♡」



「はっ、んはっ……」「ん、気持ちいい……♡」

雪子は自ら気持ち良い場所を探して動いていく。

「ああっ、あん、……ん、はんっ」

しばらくその様子を伺いつつ、「ちんも腰を動かして始める。

「ひゃんっ、んっ、だめっ……んっ、あん♡」

はっ♡

はっ♡

たふ♡

ズ♡

ズ♡

グ♡

グ♡

次第に二人の腰のリズムが噛合い、より深い所まで入っていく。

「んあつ、あ、あんっ、いっ……すっ……」

先程雪子が自分で刺激していた場所に当たるように動く。

「ああっ、あん、そこ……だめ、あ、はんっ、んうう、
突き上げ、激しっ……ああんっ、はっ、いっ、んんっ……」

んんっ

あんっ

はっ

イクイク

ズンズン

ズンズン

「ああ、いくっ、イクイク……」

ビクビクと震える膣内に刺激されてこちらも射精が近い。
絶頂に向けて二人の抽送もさらに激しくなっていく。

「んはあつ、あんっ、ダメ、イクっ、イクっ——」



んああっ
っ♡♡♡

イクイク♡
イクイク♡

イクイク♡

イクイク♡
イクイク♡

イクイク♡

一回だけでは終わらず、二度三度と体を重ねる。
絶頂を迎える度に、二人の呼吸がシンクロし、より深く繋がっていく。





「さすがに……ちよつと疲れちゃったね♡」

心地よい倦怠感に包まれながら、二人して体を横たえる。

「おちんちんも……ちよつと小さくなっちゃった」

雪子の手が柔らかくなった陰茎を労るように撫でる。そのもどかしい動きに却って反応してしまう。



「♡♡♡♡♡ | 回 | ♪♪」



「ああっ、あっ、はあっ……んっ
全部っ、出して……私の中に、全部っ♡」

雪子の膈壁が奥へ奥へと誘う様に動く。
「こちらもある限りの精を注ぎ込むべく満身の力で突く。」

「あっ……ああっ……もっと、もっと来てっ
ひうっ、ああっ、ツク、イクッ……イクッ♡♡」

パニッ♡

パニッ♡

パニッ♡
パニッ♡

ズクッ♡

ヒクッ♡

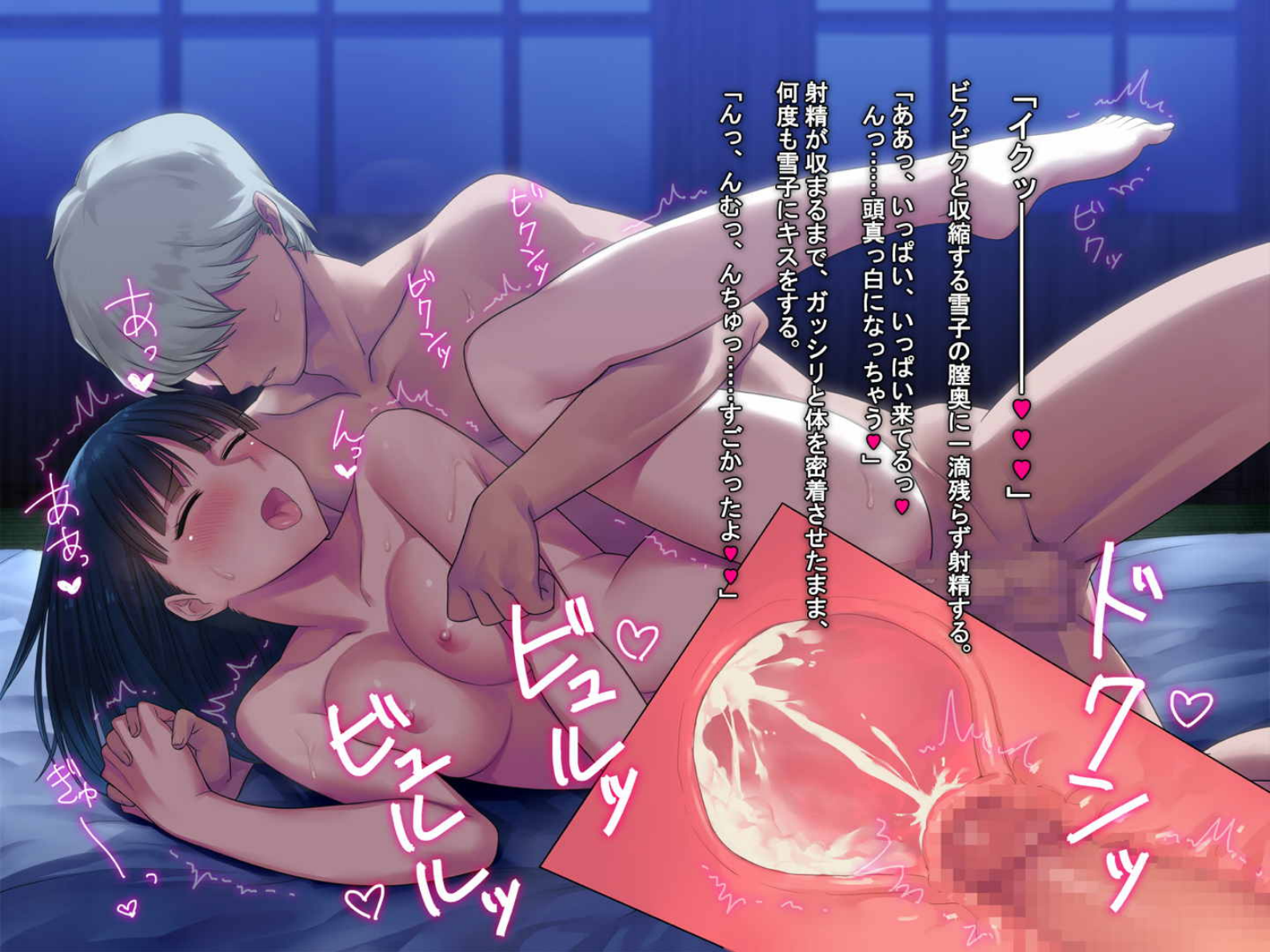
ヒクッ♡

あんっ♡

あぁ♡

あぁ♡

あぁ♡



「イクッッ——♡♡♡♡」

ビクビクと収縮する雪子の膣奥に一滴残らず射精する。

「ああっ、いっぱい、いっぱい来てるっ♡
んっ……頭真っ白になっちゃおう♡」

射精が収まるまで、ガッシリと体を密着させたまま、
何度も雪子にキスをする。

「んっ、んむっ、んちゅっ……す♡かったよ♡」

ド
ク
ッ
ッ

ビ
ュ
ル
ッ

あ
あ
あ
あ
あ

「ふふっ、体中汗だくになっちゃった。後でもう一回温泉行かなきゃね。でも、今は……もう少し」のまま一緒にいて♡」

雪子の頬を指で撫でると、そっと両手で握り返してくる。

「あったかい……♡♡」

あつ♡
あつ♡
あつ♡



「大好き……」





終